

八代海の漁具

八代海は、宇土半島、天草諸島、長島(鹿児島)などに囲まれた海です。一般には不知火海しらぬいと呼ばれています。八代海に面した海は、球磨川、前川が流れ込み、たくさんの土砂が運ばれてくる遠浅の海です。その上、干満差が4メートルと大きい(日本一干満差の大きな有明海は約6メートル)、干潮になると沖合い約2キロメートルにわたって干潟ひがたが現れます。そのような環境の中で行われている八代海の漁業は、大きく分けると干潟漁業と沖合いで行われる灘漁業なだに分けられます。

◆ 干潟ひがたで使われた漁具と漁法

エビカキ

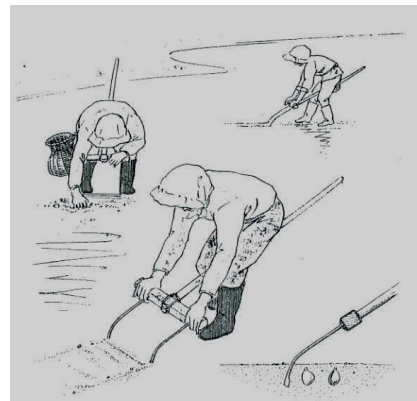
エビカキの柄えの部分を肩にあて、干潟の上を後ずさりしながら引き回して干潟の砂の中に潜んでいるエビ(車エビが主)をとります。

とったエビは、生かしておくため魚籠びくの中にぬらしたオガクズを入れておきます。



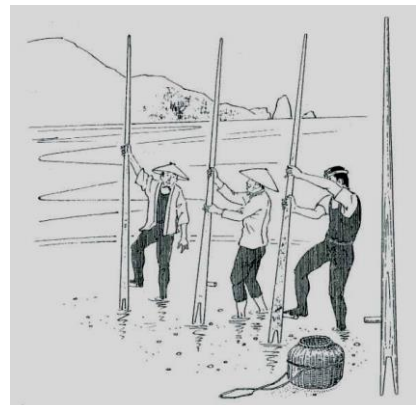
ハマグリカキ

腰をかがめて干潟の上をハマグリカキで引きながら泥ぬの中にいるハマグリを取ります。



シャクコネ

シャクコネは、干潟に突き刺して土を返し、出てきたアナジャコをすくい取ります。泥をこねるようにして使うのでシャクコネと呼ばれます。

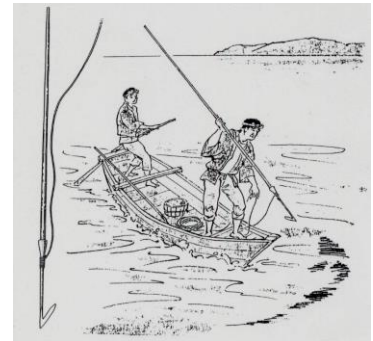


◆ ^{なだ}灘で使われた漁具と漁法

フカツキホコ

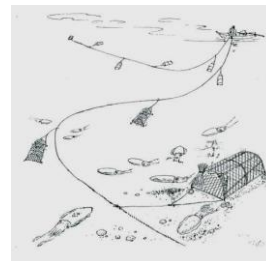
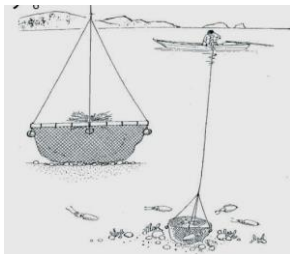
明治時代頃まで行われていたフカ漁に使われたものです。

^{ほこ}銚に柄を取り付け、長い方の1番銚でまず突きます。フカに刺さったら柄を抜き、銚に結びつけた綱でフカを泳がせ、フカが弱ったところで2番銚で突きます。 ※フカとはサメのことです。



ワカゴ(輪籠)・イカカゴ

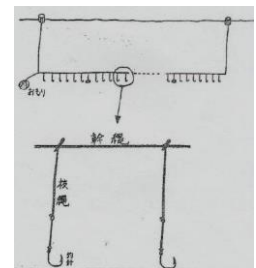
イカカゴ漁は、ツツジやヤマモモの枝を籠につけて海に漬けておき、産卵にきたイカを捕獲するという、イカが藻に産卵する習性を利用した漁法です。



フグナワ・フカバリ

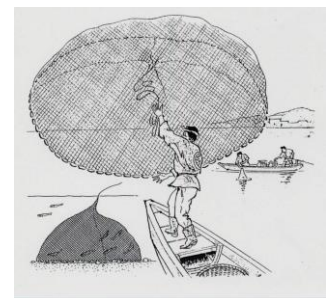
どちらも^{はえなわ}延縄漁業に使われていたものです。

延縄漁業は、長い^{みきなわ}幹縄にたくさんの^{えだなわ}枝縄をつけ、その先端に^{つりばり}釣針を付けたもので、一度にたくさんの魚を取ることができます。



トアミ・ナゲアミ(投網)

投網には、船打投網と歩行投網がありますが、この網は船の上から網を打ち、コノシロ・ボラ・チヌなどをとるのに使われました。投網の中では中型のもので、水深5メートルくらいの所で使われていました。



ウナギカキ

両手で柄を持ち、カギの部分の後ろに向けて前から後ろに泥をかいてウナギを引っ掛けて取りました。

船の上で行う方法と歩いて行う方法があります。

